

メコン川下流域におけるセン川の動態と地形発達過程

Fluvial dynamics of the Stung Sen River and geomorphic development processes in lower Mekong basin

南雲 直子^{1*}, 須貝 俊彦¹, 久保 純子²

NAGUMO, Naoko^{1*}, SUGAI, Toshihiko¹, KUBO, Sumiko²

¹ 東京大学大学院新領域創成科学研究科, ² 早稲田大学教育学部

¹Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo, ²School of Education, Waseda University

メコン川支流であるカンボジア, セン川下流域において, 6本のボーリングコアの分析と露頭調査を行った。調査地点は上流側の KC 地点, 下流側の KPT 地点である。カンボジアは低緯度熱帯地域に位置しモンスーンの影響を強く受けることから, セン川氾濫原の環境も雨季と乾季で大きく変化する。セン川はトンレサップ湖に流入する最大の河川で, トンレサップ湖の湖面がセン川の侵食基準面となる。沖積平野が発達するセン川下流域の河川勾配は非常に緩く, およそ 0.06/1000 である。氾濫原は比高 5 m 以下の台地に囲まれ, 現河道沿いに発達するメアンダーベルトとその外側の後背湿地に大きく分けられる。氾濫原では, 砂岩の基盤上に A~D の堆積ユニットが認められた。AMS-¹⁴C 年代測定によって, 後背湿地 (ユニット A~C) ではシルト~粘土が 0.1 mm/yr のオーダーで更新世末期から堆積している一方, メアンダーベルトの堆積物 (ユニット D) は比較的新しく, 数十年から数百年単位で入れ替わっていることが示唆された。ca.11 ka から完新世中期にかけて, 上流側の KC 地点では粗粒物質の堆積が, 下流側の KPT 地点では多くの植物片が見られたのは, モンスーンの強化によって降水量が増加した結果である可能性が高い。また, KPT 地点付近で地形面の形成プロセスは分化する。すなわち, 完新世中期以降に後背湿地 II 面が侵食され, 現在の後背湿地 III 面との比高の分だけ掘り下げられた結果, 現在の地形が形成されたと考えられる。こうした地形形成プロセスは, 雨季のメコン川とトンレサップ湖の逆流現象の開始と関係するのかもしれない。

キーワード: 沖積地形, メアンダー, ボーリングコア, セン川, メコン川下流域

Keywords: fluvial landform, meander, drill cores, Stung Sen River, lower Mekong basin